

報時丁然爾亞

錄附藝文



次四十三号

次尔卷

Año VI. Nº XLIII

# リヨベツト船長

ブラスコイバーニス作  
粹庵譯

ありとあらゆる冒険の伴つた四十年間の海上生活の後、  
「半昔」から引退したリヨベツト船長はカペマル村に於て  
最も有名家であつた。  
それは熱い太陽に焼けた広くて真直い道路に一階  
建ての白塗りの家の並んだ例へば亞米利加の小村と云はれ  
相違小村であつた。  
ヴァレンシア市から避暑に来た人達は、アロ先きに日  
蔭のした綿キマンパスの天幕の下で大きな安楽椅子  
に坐つて居るあの老船長を物珍らしげに眺めるので  
あつた。彼は過去の四十年間を甲板に於て雨や霧の  
しぐさにあたりながら露天に暮して来たので、湯気が  
骨の中までも浸み込んでひびひユーマスに凝み固ん  
だ終日安楽椅子に腰掛けた儘身動きをしないので過  
ごした。そして彼は立ち上る度に苦痛を訴へて怒鳴  
つた。脊が高く筋背遅しく太った下腹が兩脚の上は  
重れが、り陽にやけた赤銅色の顔は丁寧に剃られ  
居る老船長は休暇でアロの前に坐つて居る静か  
お人好しの牧師さんのやうであつた。併し彼の口  
と堅つた命令的の眼差し、人と支配する事に慣れた  
男のあの灰色の眼だけはさすがにリヨベツト船長の  
評判と彼の名前を聞く度、慄然と物珍り明白に表  
して居た。  
彼は亞米利加のメネアの海岸からアンタイサマス

島へ運送して行く黒奴を満載した彼の有名な大船  
が、船で英國巡洋艦の追跡から巧に逃れ下り断え同  
じく英國海軍との闘争の内に生涯を過ごしたのであ  
つた。勇敢で徹底的に沈着ぶ彼は断じて水夫達に  
躊躇するなと、云ふことを見せなかつた。  
人々は彼に聞かしてあらゆる惨劇を物語るの  
であつた。巡洋艦の追跡から逃れるために自分の船  
に満載した黒奴を海に投じたと話。太平洋  
の難が怖ろしい尾で波濤を立ち下り大群をなして  
集り、海の上に絶望的に手を振り動かして居る奴隷  
を遊で引き裂き下り海を血で染めること。  
或ひは乗組員の暴動の際に彼が独りでピストルを乱  
射し、斧を振り廻し下り鎮めた話。或ひは彼が急  
怒の爆発した場合には恰も猛獸の如く甲板の上  
を歩はれまわつたこと。また彼が航海に連れて行  
つた或る女を嫉妬からの紛争の拳句船橋から海  
中に投じ、之で終つたこと。云々半までも人々の話  
るところであつた。また同時に彼は非常に気前が  
よくつて水夫達の家族を扶けるためには何物をも惜  
しまなかつた。彼は一度念るや自分の子供でも救  
しつねなかつた。併し誰が海の中へ落ち込めやう  
か際は猛悪な海魚をも怖れず立所に水の中に飛  
び込んで救助するのであつた。また黒奴の買取人  
が例へばニニセセツでも彼を騙してもしやうもの  
なら彼は氣を挫いた。そして彼はその晩ハバ  
ナ市で既に有名になつて居た大盡蔵に三四十ド  
ウロの大金を消費するのであつた。船員達は彼  
を評して「彼は話す先きにひつぱたくと云つてゐた  
それから大洋を航海中に二等運轉士が彼に及  
び謀んだと云ふ嫌疑から短銃で彼の頭蓋骨を打  
ち抜いて了つた。」

斯んふことは別として、彼は彼のしつかのつ面や鋭い眼差しにも似合はふいで仲々愉快な男であつた。村の人達はカベニールの海岸の船の陽彦に集つて彼の戯談を思ひ出して大笑いすることゝあつた。彼は一度彼に黒奴を賣つて居た亞弗利加の王様を船に招待した。それから黒奴の陛下と其の侍従の者共が酔つぱらつて了つたのを見ると彼はメリメの黒奴商人のやつた通り、その儘出帆した。そして彼等を奴隷として賣り飛ばして了つた。また或る時英國の巡洋艦に追ふせられて居ると見ると彼は一晩のうちに船の色を塗り変へ櫓を換へて了つた。それ故に大膽な黒奴船を見分けるに充分な材料を持つてゐた。斯んふ英國人の艦長も其の時だけは彼の船を取り逃して了つた。

斯んふ風でリヨベット船長は海岸の人達に居たやうに海のジブシーであつた。彼は船を市場の驟馬でもあるかのやうに見争ふ姿をさせた。惨虐であると同時に寛容であり、自分の血を流すことも他人の血を流すことも一向憚らなかつた。また商賣に對しては中々のしつかり者で、對しては徹底的に居る彼を指してハバナ市の商人は「おえらい船長と呼んで居た。そして咳をしなげら腰を曲めてリウマチスに痛む足を引張り下り海岸を歩いてゐる昔彼の船の乗組員であつた僅かな老水天童は今尚ほ彼のことをそう呼んでゐる。

事業に殆んど失敗し「商賣からすつかり引退してから彼はカベニール村の自分の家に立籠りリウマチスのために身動きが出来なくなる時、怒鳴り散らすより外何等の楽しみもなく戸口に立つて餘生を送つてゐた。

彼に教養を示すために昔彼から命令や鞭打ち

までも受けたよぼの老人達に訪ねて来ては門前の通りに腰を下ろした。そして昔老船長が大西洋を差して呼んでゐたところの「大通り」について一種のランコリーを以て一緒に語り合つた。また彼を侵し巡邏船の目をくらまし下り向側へ——亞弗利加から亞米利加へ送られたことなどを想出した。

夏にふつて脚が余り痛まない具合の良い日などは彼等は海岸に出掛けた。老船長は海を見るとき大いに元氣付いて不斯からの鑄造を晴らした。彼は英國の大嫌ひであつた。と云ふのは幾度か英國の軍艦が大砲の響きの彼に聞かせたからであつた。それからまた汽船と云ふものを海に神聖を瀆すものとして憎んだ。

水平線とすすめて過ぎ行くあの汽船の細い煙は彼には海軍の脚躰であつた。もはや海上には其の水天と云ふものは存在しない。今となつては海は汽船のたぎりのものとなつてしまつた。

冬の嵐の夜がさうぶ日などは彼が海岸で鼻をうごめかせて居るのを見るのが常であつた。彼れは尚ほ甲板の上で暴風に抵抗する準備でもせんとすもの。やうに嵐を喰ひてゐた。

(續)



# 美女禮讚 美都三

女を話題にのぼせれば誰れでも先づ「オ」にその美醜を  
同題にする。これに女を論ずる正道であるらしい。従つ  
て女性美にもいろいろの種が出来る。顔に就いて  
云ふならば、道長とて全部一分のすぎもなく整つてア  
・綺麗な顔だ！と一言で讃の上で済ませようもの。部分的の  
美しさに引かれて「ア」大した顔じゃないが、あの目が  
素敵だ！とて素暗し！と下半ばくちの様には目にはサ  
リ気にも引かれて「ア」美しいってわけじゃあ、何となく  
感じのいい顔だねと所謂総合美術の部類に属するもの  
の……幸々、それに身体が肥えたの着せたの尻格好の  
らしい。美しいふんてのが加はるんだからいやはや複雑極  
まるものになつちます。

しつと、その好みたるや時代の「ア」が、要するに共に段  
々移つて行くのだから尚更やつこしい。わたしの「美女禮  
讃」も次の時代には——いや／＼もつ既に今時の若い方々  
には「美女禮讃」になつてゐるかも知れない。

(意！ 悲しい教!!)

柳腰——俗に云ふ肺病型美人のものはやされたのは徳  
川時代の事、ひと抱えあれど柳腰の数は最早現  
代に於ては必要を認めない。寧ろひと抱えもふた抱えも  
あるスボッソウマンの姿をせられ現代人は讚美するこ  
とがない。(どうじゃありませんか)。如て此の國の女即  
ちアルヘンティナはどういふか、おね／＼わたしはカ  
説(？)してゐる如く美しい事は美しいがそれは時代選  
れの美しさ、魂の抜けた美しさでは不十分であらうと思ふ。  
実際、それは十八世紀ロココ時代の美形に過ぎず、数くと

ムラオのアンテナが縦横に張り廻され、地下鉄の蜘蛛の  
巣——とまで行つてくつても、ニ本並んで走らうといふ  
現代のフェリスにはどうも相合はしくはないやうです。  
如てどういふ美しい事は美しいか、いふまでもなく、  
といふと、あんまり顔の道長が整つてゐるからなんだ。  
一体人間といふ奴は、完全とか十二分とか言つて、いつも完全  
或いは完全以上のもので、歩んで行くんだ。それを「理想」と  
稱して、そこに近づき、あり、発露があるんだ——といふと、  
まるで倫理の講義みたいになつてしまふやうだけれど、  
その癖、ものは八分目とて、完全は行き詰まるふんせん  
と、免に不完全さを喜ぶのが、身を、一向平氣で持合  
はせてゐる。だからこそ、アルヘンティナの同じ鑿型に入れ  
まポン——と叩き出した様ふ——所謂「美しい事は美し  
い」が、この強細工死面さん、段々馴れるに従つて、嫌やに  
なつちまうんだらう。「味ぢねエヤ」強過からアかん、ペン  
ツルを批評する様ふ、数もそこに原因するやうだ。  
しからは、何んかの美しいか——とあると、話はいよ／＼  
面倒になつて来るが、ア有名無名の美女を挙げて、片ツ  
端から類の造作を「ア」には、こして見やう。然し一言  
お断りして置きたいのは、美の標準は絶対的のものに非ず  
して、相対性のもので、アインシュタインが去つたが、どうが  
免に角、わたし一個人の見解であつて、決して代表的なもの  
ではない——かも知れないといふ事だ。  
同感の士があれは幸甚、たとへ非同感の士があつたら  
「又貴無筆者」といふがよ。

先づ、造作のオ一番に接吻に縁のある「ロ」から初めますが、  
どうも此の頃の様に、唇と口唇を塗られたんじやア、ど  
うも本来の形を破壊すべく非常に不便を感じて困る。  
こんな厄介な事、いつの時代から初まつたかといふ。敢  
て現代のモガ諸嬢が羨見したもので、はな／＼、度々、及



時代に於て既に行はれて居たのだ。一、赤色を化粧法に用ひるに至つた原因は、赤色、即ち血の色であり、血は生命の源泉であるから、血と同じ色の顔料で化粧すれば、失はれんとする生命を保持し、旺盛なる生命を一層旺盛にするを考へた結果、埃及のスタイアン博士が工夫したものであらう。

旧王朝時代、王妃ネフェルテネの頬と唇には輝くばかり美しい紅が塗られてあつた、同様に古代日本に於ても、丹精と以て顔面に塗抹する化粧法が行はれ、古代蒙古に於ても、胭脂を以て双頬や唇を染めることが行はれてゐたらしい。

だらりの帯に振袖を纏ひ、はつくりをカラコロと小まりにいそぐ秘國舞妓の唇は、緑色にまで濃く紅が塗られてゐる。あれは可憐なものである。然し皆が皆、あれでも困る。

大分餘韻が長くなつてしまつたが、更に角、如上の理由で現代の娘さん達の唇は一層だけでは判断に苦しむ。誰の女性と解く時は、口と眼だけだと言はれてゐるのに、その口を塗り隠されてしまつては、残るは眼だけといふ事になる。「眼は口ほど心むくものでなす。此の廻子で行つて最後に眼も現在の口程にしつもの」と云はふことが出来たら、果して女性の謎は何処で解くか？

「女性の謎を解き得たるもの、レノナルド・ダヴィンチ人ののみぞ救ふはなす。」

「モノリザ・ザロロに濃はす謎の微笑——ダヴィンチ人だけでも昔はその謎を解き得たものぢやあつたのに、果して現在はどうであらう。口癖の様に男性の理解を求むる女性、及対に鏡穴を半分閉じてしまふ、彼女達は結局、謎は謎のまま、残して置きたいのだらうか？」

若しダヴィンチが現在生きてたら……いさゝか、此の場合、妾を空想はお事に止めてやう。

そんな事はどつちにしらう。わたしは可成り以前に死んだ活動女優バール・ラマーの唇が可成り好きだつた。そしてあの時分わたしは、シヨコンダの微笑の様に、彼女の唇が矢張り一つの謎であつた。だが、そんなふうに考へた足で最早それは過去の事だ。今頃は墓場の下で彼女の體が白い歯を剥き出して無意味に突つてゐる事だらう。

リ・マン・ギンシユの口——あれはとも少くない。櫻ん坊の笑が、まるで一つの謎のツラさかゝつて考へたこともあつた。つら、あの口が、あの女の生命ぶのじやないやうに……。

反対に、シヨマン・フロワネットの口は何とぞ、さういふ事か。然しあの口はあれで、大いびりにわたしにとつて好ましい口だ。

大きいと云へば、ジャネット・マストオールドの口。相当綺麗な女だ。あの初心が、嬉しむ姿は、大方の見物や批評家の脚氣に召した様だつたが、わたしに云はせれば、いさゝかにも醜い口である。かう云ふ美しい顔がある一つの缺點のためには、味茶若茶にぶつこわされてしまふことは、いさゝかにも惜しい。此の文の最初に述べた如くある一面の美しうで、他の醜さを覆ひかくして、余りある場合、さういふのは、これと反対の例を見ると、いさゝかにも、その美場人のためにお氣の毒を氣がしてぢやない。

この國の婦人では、わたしの知つてゐる家庭の嬢さんには、一口だけ素晴らしい綺麗なものが居た。本人もそれを自賞してゐるせいや、決して口紅を用ひない。勿論種は西洋美禮ではないらしい。この艶容をよく理解して、それは相成した化粧法をほどこすことは、到底日本人は外人にさむわいさうだ。外國へ来ると日本の女性が、方々で見えるのも、一つはかうした事か原因のだらう。(御免下さい)

それから口と云へば、齒だが、これも日本では昔から一向氣にしない様だ。

外人は男も女も非常に歯を——殊に前歯の美観を  
気にする。(と云つて天子自身しよつちゆう齧歯では苦  
しめられてるんです)男は兎に角(少し卑怯です)女  
は笑つたりむねを云つたりする時この歯の美観は何  
う非常に関係する様である。  
實際水谷(童子)の妹切齒を讚美する人がある様で  
は日本もまだ(女性美研究の余地が大いに  
あるわけだ。さへ行くところの歯は歯だけ文  
句をしない美しいと思ふ。ニーツと微笑むと赤い唇の  
綻びが真珠を並べた様で美しい歯がキラリと白く  
輝く。——考へただけで素敵じゃありませんか?)

眼と云へば日本では古来二重眼を尊重してゐる。海  
世絵の美人には二重眼は絶対になくてはならない。又それ  
だけに日本には二重眼が愛され、外国では反対に二重眼が  
奇無といつてもよい位に少い。  
如き古い東洋の肖像画を見ると時々二重眼に生かすこ  
とがある。その二重眼の日本婦人には又二重眼が段々  
多くなつて来た様だ。ここに於てつらくわたくし思ふ  
に——勿論わたくしが勝手に想像した事では決して無い  
美学者が言つた事じやないのだから真偽の程は保証  
し兼ねるが——審美標準の向上(さ)と共に容貌も  
段々変化して行くのではあるまいかと。即ち二重眼が  
二重眼へと次第に女性美が進化して居つたのではある  
まいか。日本は今その途上にある。  
然し日本式二重眼と外国式二重眼は断然相異であ  
る。  
日本式のは未だ二重眼が思ひ切つて脱し切れな  
い程深いものであるが外人のはとても深い中には一重で  
はふいふしと思はれる程今二重の方が増えて上へあ  
つてゐるのがある。

眉も鼻も口も除いて只眼だけの美しさをいふとロー  
リングフェイスや、ミルドレッドハリスや、タウの  
眼も非常に整つた美しさである。だがそれだけに  
余り味がない様だ。  
眼の持つ魅力といふ方から云ふと前にも述べたラマル  
それからわたしの好きふラリゲント・ヘルムや、ブレタガ  
ルボふんが深い程チマミンだ。  
殊にガルボの眼ふんがあのお嬢の存在を完全に無視  
させてしまふ程に魅力がある。さうもあのガ  
ラク(声では)と眉を少しづつある人がある様だが一體  
わたしは女の少し皺れた声が好きだ。——  
又脱線してしまつた。  
わたしは嘗てある女に「あなたの眼は馬の眼の様だ  
と云つて恐ろしく叱られた事がある。これは彼の女の  
方が悪い。わたしは一生懸命で讀めたつもりなんだ  
から」。

試みは氣をつけて「らん」なさい。動物の中で馬程美  
しい眼を持つてゐるものはありません。馬の眼には人間  
の様に心んぐり眼や、かま眼ふんが決して無いんだ  
から。その馬も二重眼のうるぬ勝ち。何とも云へない  
おつとりとした美しい眼を持つてゐる。然しこの眼の  
美しさには非常に眼が影響する。この大事も眼が  
又古来日本では余り問題にされず居ない様だ。勿論  
問題にしたくとも日本人にはほんの少しだけ生えて  
だけだから仕方がないであらうが——この目の場  
人達なんが寫眞を撮る時ふんが出来上つたら寫眞に  
筆で眼を画き加へて受れと注文するのが多いう  
だ。筆で描くなんて随分派手な話だが事實それ程に  
に「眼といふものを重大視してゐる」。  
例のグレイタ・ガルボふんがこの眼のよい方だ。一時ブ  
エノスにレヴィスタが全盛だつた頃、踊子の中に素晴し

く睡の長いのでいたことがあった。長い睡を伏眼勝ちにする。何ともなほ、い約徒的なきじのするもので、今は何処へ行つたか知らぬが、スターラントで女僕さんか何一つ取らぬ女のつた。嘘だけ物凄く程長く涙も出てそれ一つのは、何とも云へない。フアンタスティックな気分を出す。実際眼と鼻の間の隙に、女が笑ひさして、生命以上は大勇なものだ。

「やと眼十画」とはよく去つた。取て睡の爲と云ふのは、ふいざセルツァンケルマンの眼も、詩を朗讀する。女の口程にも、を去ふといつたつて、眞言はあるまい。たつた一瞬時のウインクも、語るを？？？實際恐ろしい。眼は口以上にも、を去ふ。(續)

### 名歌手ネリ・メルバの生涯

廿三日、ポーランドのオポーレに於て、世界的オペラの名歌手ネリ・メルバがオポーレに於て、病没した。享年六十九歳。

世界著名な名歌手と見ると、寧ろ *No. Prima donna of the present day has ever been as beloved in those continents as has this Australian artist.* と云ふべきであらう。

先に、タマニの後に継ぐと称せられたカルー、死し、アデア・リナ、マリー(一四三三—一九一九)に通過するものは、彼女の如く、讃へられたメルバを失つた。これで、世界の音楽界を代表する所種編を失つた事になる。音楽界にとつては何と云へないか、次である。

彼女は一八三一年、ポーランドのオポーレに於て、生まれ、メルバ

ポレンダの思ひつてつけたが、彼女の藝名メルバなのだ。父は彼女が生まれる二三年前にスウェーデンから帰つて来た請負師で、早くから娘の天才を認め、ゆくゆくは音楽家にはなれるつもりだつたらしく、父親はそのつもりで彼女に幼少の頃から音楽をせよ、初めは然し彼女が正式に音楽を習ひ初めたのは、チヤレス・アマストロツ、大尉と結婚した後、一八六六年に歐洲へ行つて、マルチェシ夫人のコンセルトに入つたのが最初であつた。

夫人の許で居られた彼女の楽才は、僅か二ケ年の間に、メキと上達して、一八七七年には既に、フランスに於てメルバと云ふ藝名で、初舞台を踏んでゐる。

そして、明年ロンドンで、スエラ・リチアと上達した時等は、あの冷靜な英國人が殆んど血眼になつて、熱狂した程、素晴らしい成功を収めた。又彼女は、ソイフトラ、女王時代を知つてゐる最後の藝術家であるとも言はれてゐる。

「メルバ」の名と「ジェリエット」「ツイスト」「カルメン」「エーグ」「手紙」を得意ではあるが、中でも彼女の「心チア」は非常に有名なるもので、*Senza d'alla pagella* (裸足の場) などに至つては彼女の後に彼女が、そして、進歩せられた程である。

彼女は、青瞳しく、カールと云ふ、澄み切つた、ハイソプラノで、非常な技巧家である。知んが、一寸現在の、マリヤ、ドンナであるが、リチア夫人に似て居る様だが、夫人の聲が、黄金色の響きを帯びて、圓いのに、及して、メルバの文のは、丸味を帯びた、柔らかなる、声である。

神童であつた。知もガリッリチア夫人に似て居る様だが、夫人が、時々も、あつて出来、不出、来、の、夢、い、の、に、及、して、流石、メルバ、夫人、は、如何なる時、に、開、いて、も、決、して、出、来、傑、の上、下、は、な、かつ、た。

と、有名、な、批評、家、ウイリアム、ス、は、言、ふ、て、ゐ、る。

(F. H. B. 三田)

(6)

短歌 折々の歌 みのる

今一度祖國の土を踏みたしと  
月にかこちし吾れにてありしも、

滞りたしと思ふ心とあひ笑ふ  
祖國はわれを勤告せしに、

世界のはまとは流れ歩るきて  
われ大いなる愛を知り泣く、

月に向ひて口笛吹けば  
泣きたくなりぬさすらの身は、

人々はなぜを愛と嫌ふや  
ともに語らば泣かざる、彼あるに

人並みにやこし心持つ吾れを  
壯士とぞ呼びて人のおぞる、

こころも時は弟よわれアマソンの  
春に出で、死なむと思ふ

寂しけれど静き心になりぬ  
わが人生の終りんとするこのころ

再びサンパウロの町を見むとも希はず  
これと念ひたしと思ふ人の三四人あり

その壯國千里の友につけなむと  
べんとればふとかなしくなりぬ

心よきつかれふり一日山に入りて斧ふれば  
五月晴きこの思はぬともせで、

労働はキリストよりも有難し  
考へることのあまりにも寂しき世なれば、

真白きゾリアが毒ふれば  
一輪たべて死ふむと思ふ、

声たて、そと父を呼びて見たり  
ひとり旅ふる真山路にて

さすらの旅に上りて早や五年  
年賀の文の絶えしをさびしき、

野良犬は寂しがるらむ徳ぶべき  
宿のぼくして彷徨へるは、

われこの世に不要となりて  
かく長き日をさまさまに飽あり、

短刀をそと懐にふれて見たり  
不徳漢A氏とにのみしタペ

カバレの婦へりに死んでよと云はれ  
懸けてよと云はれ生ひしわれあり、

友を一人ほしいと思へりそは水差を  
とるだにもものうき日なりけり、

外國にふしてわれ思ふやう  
わがふきぐらを誰が捨つかる、

白塗のコンクリート壁のつたさに  
一輪の花をほして思へり、